

【ギリシャ分科会報告】

吉田秀樹

ギリシャ分科会という新しい分科会に、一体何人の人に来てもらえるのか不安でしたが、28名の方々に参加していただき、伊香保の夏の熱い検討会を持つことができました。提出資料は7本で、発表資料は5本でした。

最初の資料発表は、私の「原子論の誕生と生み出した人びと」でした。これのもののタイトルは、「ミョウバンと原子論の誕生」でした。ところが「このタイトルでは、誤解を招きやすい」という指摘(愛知の山田芳子さん、正男さん、大阪の西村先生、愛知の岸さんから)を受けてのタイトル変更でした。何回も発表してきたので、かなりいけると思っていたのですが、まだまだ課題が多いことがハッキリしました。結局、「ミョウバンとは何か?」「ミョウバンが古代原子論の誕生にどうかかわっているのか?」がまだハッキリと見えてこないということが問題だということがわかりました。しかし同時に、この問題が解くに値する重要な問題だということも、この分科会での検討で、確信できました。この分科会で指摘していただいた問題点を解決し、今は「完成までやりきるぞ!」という心境です。今度のギリシャ旅行最大の課題として、更に研究を深めたいと思います。

2番目の発表は、山田芳子さんの「ミョウバンと明礬石はちがう」でした。「ミョウバンとエピクロスと原子論の誕生がどう結びつくのか?」という問題を、〈明礬石からミョ

ウバンを製造することは、本当に可能なのか?〉〈古代ギリシャにおいては、純粋なミョウバンの結晶が採れていたのではないか?〉という問題に関連づけての発表でした。鉱物研究者の間では、顧みられることのないミョウバンですが、実は人間の歴史を支えた重要物質なのです。しかし、その歴史は混乱しています。その混乱の紐をほどいて、ミョウバンの歴史をたのしい科学とするため重要な研究をされていると感じさせる素晴らしい発表でした。私にとっても教えられることの多い発表でした。

3番目の発表は、長崎の平野隆昭さんの「ミョウバンを知らない者がミョウバンについて調べてみた」でした。平野さんが、いつの間にかミョウバンのトリコになっていかれる過程を発表していただき、たのしい発表となりました。平野さんをここまで虜にするミョウバンの凄さを再認識させてくれる素晴らしい資料でした。

結局3本の発表資料が全て、ミョウバンと関連していて、まるで「ギリシャ分科会ではなく、ミョウバン分科会」のような流れになりましたが、それでいいんだと思っています。つまりそれくらいミョウバンは、古代ギリシャに限らず、古代社会そして中世社会の発展において、重要な物質だったということを、私は今感じています。だからこそ、そのミョウバンの素晴らしさを多くの人にたのしく納得していただきたいと思います。そのためにも更に研究を深めていきたいと思える分科会でした。

後、発表時間を取ることができなくて申し訳ないことになったのですが、東京の山本裕さんから「紙で作る八面体」という資料を提出していただきました。きれいに結晶した時にできるミョウバンの正八面体を紙で作るという資料で、これもまたミョウバンつながりで、この分科会にふさわしい内容でした。

現在分科会の音声記録を何度も聞き直していますが、重要な指摘をたくさんしていただいていることに気づいています。テープ起こしをして記録に残しておかないと申し訳ないと思える内容です。テープ起こしをしたいと思っています。

分科会に参加されたみなさん、全国大会を支えてくださった実行委員みなさん、本当にありがとうございました。ギリシャ研究旅行に向けて、分科会で指摘していただいた課題をしっかりと解決して、ギリシャに行ってきます。また旅行についても、報告したいと思っています。